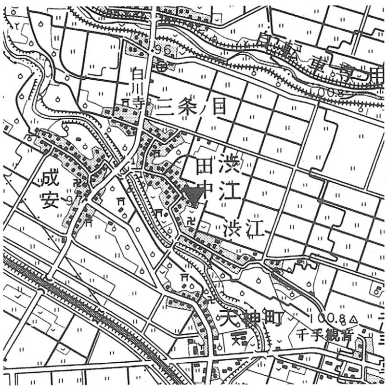
山形・渋江（しぶえ）遺跡

1　所在地　山形市大字渋江字田中・寺小路
2　調査期間　第四次調査　二〇〇一年（平13）四月～九月
3　発掘機関　㈶山形県埋蔵文化財センター
4　調査担当者　押切智紀・多田和弘・西田明日香
5　遺跡の種類　集落跡・墓域
6　遺跡の年代　古墳時代～近代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

渋江遺跡は、山形市北西部の明治地区に所在し、白川（馬見ヶ崎川）右岸の自然堤防上に位置している。一九九九年から東北中央道建設に伴って、遺跡西側を調査している。



（山　形）

第四次調査は、地方特定道路整備事業に伴う調査である。調査面積は、四〇〇〇㎡で、古墳時代・中世の建物や近世・近代の墓壙などの遺構が検出された。特に近世・近代墓は一六九基を数え、調査区南側を中心に広範囲に広がっている。埋葬方法としては、大きく①直葬（土葬）、②箱形A、③箱形B、④早桶の四種類に分けられる。②は底部に横木を渡して木棺を固定し、その上から莚を敷いているもの、③は板に釘を打ち付けて固定し、板材や角材で補強されているものである。直葬が各時代にわたっているほか、箱形Aは一八世紀後半から登場し、一九世紀に入ってから箱形Bや早桶が使用されるようになった。墓域は、曹洞宗真福寺に隣接しており、寺の領域と密接に関係していると思われる。

墨書や刻書のある木製品・石製品は、全て墓壙内から出土している。位牌のほか棺そのものに墨書したものもあった。また、「加藤勇作」と背面に刻まれた、故人の愛用品と思われる高嶋硯も出土している。そのほか墓壙からは、近世・近代の陶磁器や土製品（母子像）、鉄製三足鉢、煙管、銭貨、木製品（箸・下駄）などが出土している。

8　木簡の釈文・内容

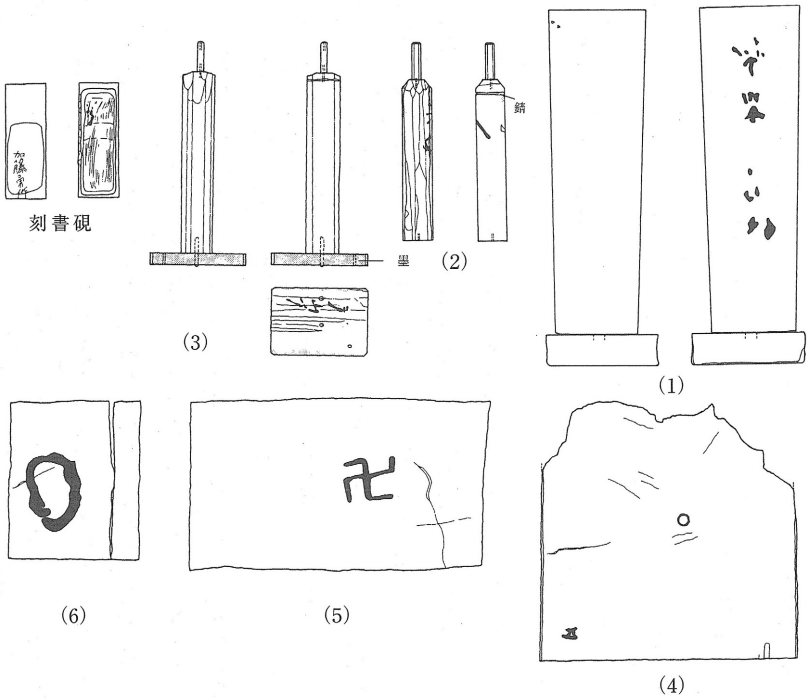
(1)　「□□」　280×87×37　061
(2)　「□」　156×23×12　061
(3)　「戸山□」　176×74×53　061
(4)　「五」　(450)×400×12　061

(5)　「卍」　270×465×(12)　061

(6)　「〇」　249×207×(12)　061

(1)～(3)は位牌である。(1)は、上端部のやや広い棹と鋸状工具で切られた角材の台座で構成されている。墨痕は棹片面にあり、被葬者の戒名が記載されていたと思われる。(2)は六ないし八角の棹の上端に長さ三㎝程度の棒を刺し、下端に板状の台座が付く。それぞれ棹、台座に墨痕や墨書が確認されている。(4)～(6)は棺の側板で、下端もしくは中央に墨で印を書き入れている。

9　関係文献

(財)山形県埋蔵文化財センター『渋江遺跡第四次調査報告書』(二〇〇二年)

(押切智紀)